

## 複線径路等至性アプローチにおける 「拡張版・歴史的構造化ご招待」の提案

エドワード・ハレット・カーの歴史哲学とヤーン・ヴァルシナーの文化心理学を  
手掛かりとして

発行：2023年9月9日  
[掲載決定：2023年1月24日]

小山 多三代（東京外国語大学大学院総合国際学研究科）\*  
土元 哲平（日本学術振興会（大阪大学））

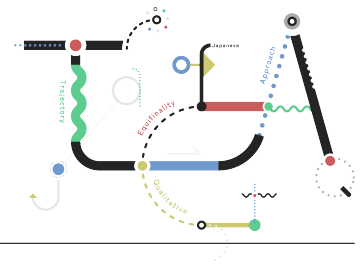
### 概 要

近年、多岐にわたる研究領域において「複線径路等至性アプローチ（TEA）」が盛んに活用されている。TEAの理論的枠組みにおいては、等至点概念と歴史的構造化ご招待が不可分な関係として位置付けられている。これまでの歴史的構造化ご招待における「歴史」は、一般的に「過去」の出来事や経験として捉えられており、等至点的な事象を調査時点までに（過去に）「経験した」人が研究参加者となる場合が多い。しかし、教育や臨床の現場においては、目標や未来に向かいながらも彷徨いの最中にいる人も存在する。現状の歴史的構造化ご招待の枠組みでは、このような未来や目標に向かって研究参加者を「ご招待」できないという限界がある。そこで、本稿では、「歴史」を再考する上で、エドワード・ハレット・カーの歴史哲学とヤーン・ヴァルシナーの文化心理学に基づく理論的考察を行い、これらを踏まえ、歴史的構造化ご招待に「過去の」出来事や経験だけでなく、その人の未来展望も包括するという理論的拡張を提案する（「拡張版・歴史的構造化ご招待」）。これにより、従来、研究参加者にできなかった、等至点的な事象に向けて歩みつつある人々を研究参加者とすることを可能にする。

キーワード：複線径路等至性アプローチ（TEA）、歴史的構造化ご招待（HSI）、等至点、エドワード・ハレット・カー、ヤーン・ヴァルシナー

連絡先：小山 多三代（E-mail: koyama.tamiyo.research@gmail.com）

\* 現所属：立命館大学大学院人間科学研究科



# An Expanded Version of Historically Structured Inviting in Trajectory Equifinality Approach:

From the Perspective of Edward Hallett Carr’s Philosophy of History and  
Jaan Valsiner’s Cultural Psychology

Published: September 9, 2023

[Accepted: January 24, 2023]

KOYAMA Tamiyo (*Graduate School of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies*)\*

TSUCHIMOTO Teppei (*Japan Society for the Promotion of Science (Osaka University)*)

## Abstract

Recently, the Trajectory Equifinality Approach (TEA) has been widely used in various research fields. In the theoretical framework of the TEA, the concept of Equifinality Point (EFP) and the Historically Structured Inviting (HSI) are defined as inseparable relations. In the HSI, “history” refers to events and experiences in the “past.” Therefore, participants have been limited to those who have “experienced” the event of EFP (in the past). However, in educational and clinical fields, there are people who are in a state of conflict while facing their future goals. The limitation of the HSI is that it cannot “invite” participants based on such futures and goals. Therefore, in reconsidering the idea of “history,” this paper theoretically discusses Edward Hallett Carr’s philosophy of history and Jaan Valsiner’s cultural psychology. Based on these theoretical considerations, this paper proposes a theoretical extension of the HSI to include not only “past” events and experiences, but additionally, a person’s future perspective. This “extended version of HSI” enables us to invite people approaching the EFP.

**Keywords:** Trajectory Equifinality Approach (TEA) , Historically Structured Inviting (HSI) , Equifinality Point, Edward Hallett Carr, Jaan Valsiner

Correspondence concerning this article should be sent to:  
KOYAMA Tamiyo (E-mail: koyama.tamiyo.research@gmail.com).

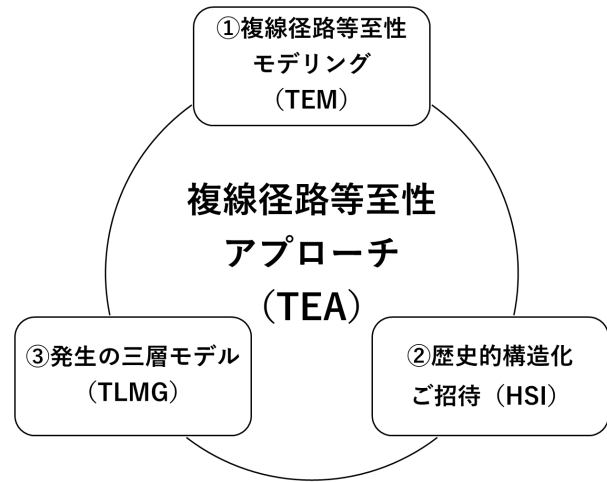
\* Current affiliation: Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University

図1 TEA の3つの構成要素  
(サトウ, 2015a, p. 4, 図 1-1 を一部改編)

序論：複線径路等至性アプローチの概要

近年、キャリア教育研究や第二言語教育研究、臨床心理学研究など、多岐にわたる研究領域において「複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach, 以下, TEA)」が盛んに活用されている。TEA とは、「時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする文化心理学の新しいアプローチ」(サトウ, 2015a, p. 4) であり、「構造 (ストラクチャー) ではなく過程 (プロセス) を理解しよう」(サトウ, 2015a, p. 4) とするものである。本研究では、TEA の理論的拡張を提案することによって、TEA のさらなる発展に貢献することを目指す。

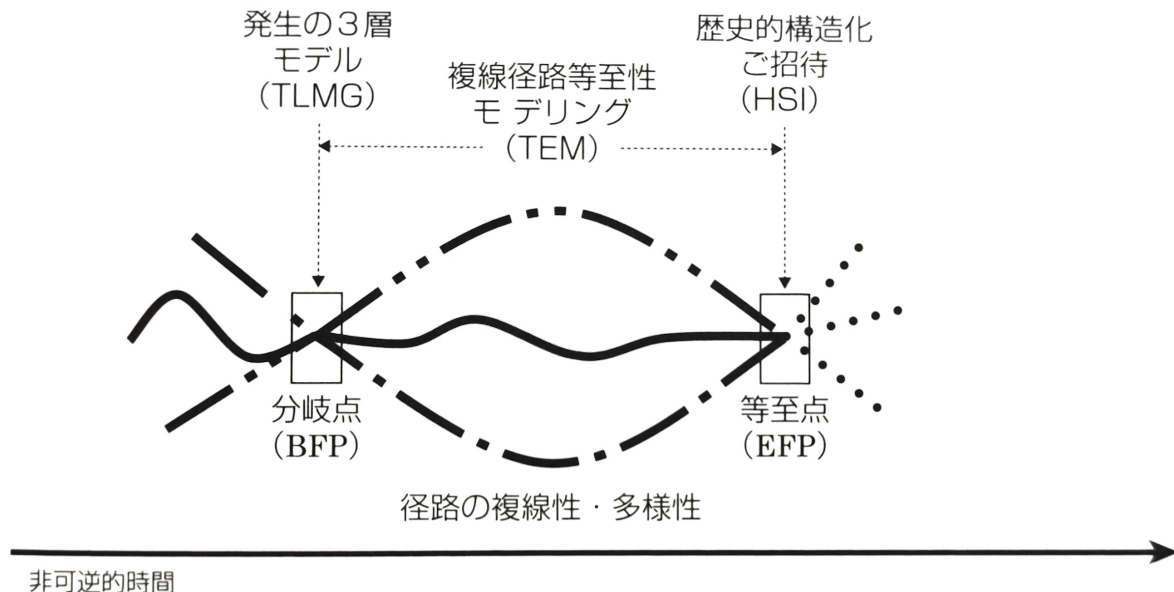
本稿では、まず、TEA の全体像を浮かび上がらせ、本研究に関連する先行研究を紹介する。続いて、既存の「歴史的構造化ご招待」の理論的枠組みについて詳述し、その限界を指摘する。次に、エドワード・ハレット・カーの歴史哲学 (Carr, 1962/1961) とヤーン・ヴァルシナーの文化心理学 (Valsiner, 2007, 2014a) を手掛かりとし、歴史的構造化ご招待の理論的拡張を提案する (「拡張版・歴史的構造化ご招待」)。カー (1962/1961) の『歴史とは何か』を参照する理由は、同書が戦後の歴史学に大きな影響を与え、人文・社会科学における古典として評価されているためである (西村, 2015)。また、ヴァルシナー (2007, 2014a) を参照する理由は、ヴァルシナーの理論が TEA の学術的基盤となっているからである。



以下では、TEA の概要について、安田・サトウ (2012), 安田・滑田・福田・サトウ (2015) 等に基づき説明する。TEA は、図 1 に示す 3 つの要素から構成されており、以下に各要素の概要について説明する。

一つ目は、TEA で人生径路を描く上で重要な構成要素である「複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling, TEM)」である。TEM とは、「非可逆的時間 (irreversible time)」という時間軸を重視し、「実現したこと・していないこと」の 2 次元で、個人の変容を社会との関係で捉え記述する方法である (安田・サトウ, 2012) (図 2)。

図2 TEA の全体構造 (安田, 2017, p. 13, 図 0-3 を一部改変)



TEM では、様々な概念を用いて径路の複線性・多様性を可視化する方法をとるが\*1, その中でも特に重要な概念に「等至点 (Equifinality Point, EFP)」がある。等至点とは、個人が多様な径路を辿っても等しく到達する点であり\*2, 研究者の関心に基づいて設定される概念である。

二つ目は、「歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting, HSI)」である。歴史的構造化ご招待とは、「等至点を経験した人を調査にお招きする」(サトウ, 2015a, p. 4) という、研究参加者の選定に関わる枠組みである。例えば、研究者が「A 大学に入学する」という事象に関心を持った場合、「A 大学に入学する」が等至点として設定され、「A 大学に入学する」という経験をした人を研究参加者とするということである(「歴史的構造化ご招待」の節で詳述)。

三つ目は、「発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis, TLMG)」である。発生の三層モデルとは、個人の内的変容(発生・実現)を、個人活動レベル、記号レベル、信念・価値観レベルの三層で記述・理解するための自己モデルのことである(安田, 2015)。TLMG は、人生径路における分岐点\*3を分析する際に用いられることが多い。

以上が TEA の理論的枠組みの概要である。ただし、本稿においては、等至点と歴史的構造化ご招待との関係に焦点を当て理論的拡張を提案するため、この2点の検討を中心に行うこととする。

## 歴史的構造化ご招待

### 1 歴史的構造化ご招待が依拠する考え方

これまでの心理学研究においては、統計的検定から導き出されたエビデンスに重きが置かれる傾向にあった(Hubbard & Ryan, 2000; Omi & Komata, 2005)。ヴァルシナーとサトウ(Valsiner & Sato, 2006)は、このような研究の根底にある、「閉鎖システム(closed

system)」の考え方が人間の理解に適していないことを指摘した上で、人間を「開放システム(open system)」として捉える重要性のもと、歴史的構造化ご招待を提唱した\*4。

ここで、TEA の哲学的背景となっているベルタランフィ(Bertalanffy, 1973/1968)のシステム論をもとに、閉鎖システムと開放システムについて概説する。閉鎖システムとは、「環境から孤立し、環境と相互交渉をしないシステム」(サトウ・安田・木戸・高田・ヴァルシナー, 2006, p. 260) のことであり、最終状態が初期状態によって決定されるという特徴を持つ(サトウ, 2017, p. 4-5)。例えば、ボールを持っている手を離せば、ボールが下に必ず落ちるといような事態(サトウ, 2017, p. 4-5)は閉鎖システムで説明することが可能である。開放システムとは、「それをとりまく外界・環境との交換関係抜きには存在しえないシステム」(サトウら, 2006, p. 256) のことであり、ベルタランフィ(1973/1968)は人間を開放システムとしてみなすべきとの考えを示している。

このような開放システムにおける重要な概念として、ベルタランフィ(1973/1968)は、ドイツの生物学者ドリーシュの提唱した「等至性(equifinality)」の概念を『一般システム理論』に取り入れた。等至性とは、異なる径路を辿っても等しい(あるいは、類似の)結果に辿りつくことを説明した概念である。例えば「A 大学に入学する」という等至点に至るまでには、高校卒業後すぐに入学するという径路もあれば、社会人経験を経て入学するという径路も考えられる。さらに言えば、生から始まる人間にとっては、死が等至な結果であるとも言える(サトウら, 2006, p. 261)。ヴァルシナー(2001)は、このような等至性が実現するポイント(等至点, 図3のY)までには、「複線性(multi-linearity)」があると考え、人間の発達を開放システムで捉えることの重要性を示している。

以上を踏まえ、ヴァルシナーとサトウ(2006)は、これまでの心理学研究が人間を閉鎖システムとして捉え、個人とその文脈、個人の属する歴史を抹消して一般化を図ろうとしてきたことの問題点を指摘した。これまでの心理学研究においては、人間が時間とともにあることへの考慮が十分になされておらず、そのような例の一つとして、比較文化心理学の研究が挙げられている(森, 2009,

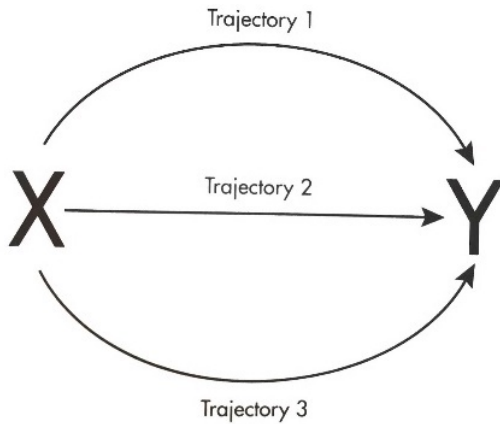
\*1 このようにして可視化された図は、「TEM 図」と呼ばれる。

\*2 ただし、TEA においては、人は非可逆的時間の流れの中で発達すると考えられているため、等至点概念でいう「等しい」は「同一の」経験というよりは「類似する」経験を指すことになる(Sovran, 1992)。

\*3 「複数の径路が発生・分岐する有り様を示す概念」のことである(安田, 2017, p. 11)。

\*4 Valsiner & Sato (2006) で提唱された当初は、「歴史的構造化サンプリング(Historically Structured Sampling, HSS)」とされていたが、後に用語が見直され、現在では「歴史的構造化ご招待」と呼ばれるようになっている。

図3 開放システムにおける発達の複線性と等至性  
(Valsiner, 2004a, p. 14, FIGURE 1.4)



p. 84-88)。比較文化心理学では、文化を「人が入る容器」(森, 2009, p. 88)と見なし、国や地域という枠組みが人の特性に影響を与えるという前提のもと、比較対象を位置づけることで文化の影響を見出そうとする(木戸, 2019, p. 8)。例えば、ある人が日本の文化の容器に入ると、その人は日本の文化の影響によって変化し、イギリスの文化の容器に入ると、イギリスの文化の影響によって変化すると見なされる。このように、比較文化心理学においては、異なる国や地域における成員間の差異を明らかにすることが中心的な関心であり、人間の発達にどのように文化が関わるかという時間的な側面については看過されてきた。

一方で、TEA が依拠する文化心理学においては、人に文化が属すると考えられており、人間が時間とともに発達し、変化していくという側面が重視される。このような観点から、TEA においては、人間が経験によって変化し、それ以前の状態に決して戻ることはないという考えのもと、「歴史性」\*<sup>5</sup> (森, 2009, p. 84-85) を考慮する点にも特徴がある。

以上の通り、TEA においては、「等至性」、「複線性」、「歴史性」が重視され、個人の経験は決して個人の内部のみに還元されないものであり、個人が生まれ落ちた場所・文化・歴史の影響を受けざるを得ないと考えられている(サトウ, 2009a, p. 38)。

このような観点から、歴史的構造化ご招待においては、①研究参加者を無作為に抽出するのではなく、人々に類似して見出される特定の歴史に基づいて研究参加者を選定し、②「サンプル」として外的に扱うのではなく、

\*<sup>5</sup> 歴史性とは、経験による人間の非可逆的かつ漸变的に変化してきた履歴であり(森, 2009, p. 85)、序論で触れた「非可逆的時間」とも密接に関わっている概念である。

「ご招待(inviting)する」という方法をとるのである。

## 2 歴史的構造化ご招待の理論的境界

序論で述べた通り、歴史的構造化ご招待は、TEA の研究参加者の選定に関わる重要な枠組みとして用いられており、等至点概念と不可分な関係として位置付けられている。序論でも述べた通り、歴史的構造化ご招待では、「等至点を経験した人を調査にお招きする」(サトウ, 2015a, p. 4)という手続きを取ることから、同枠組みにおいては、「過去」の出来事や経験に重きが置かれている。したがって、等至点的な事象を調査時点までに(過去に)「経験した」人が、研究参加者になることが一般的である。

しかし、教育や臨床の現場においては、目標や未来に向かいながらも彷徨いの最中にいる人も存在する。例えば、行為の継続や意欲の維持に「成功した」事例ばかりではなく、未来や目標に向かって葛藤しながらも歩むプロセスを理解することも重要である(例：言語学習を習慣化する、教師として成長する、禁煙する)。このように、研究者の関心が「その人が目指してはいるが、まだ経験・到達していない事象」(未来展望、目標)にあっても、現状の歴史的構造化ご招待の枠組みでは、そのような未来や目標に向かい彷徨っている研究参加者を「ご招待」できないという限界がある。したがって、何かを実現できた人だけでなく、まだ実現できていない人も「ご招待」するための理論的拡張が求められる。

### 未来・目標志向の等至点に関する先行研究

上述の通り、これまでのTEAを用いた研究では、等至点として設定された事象を現在(調査時点)までに「経験した」人が、過去にどのような人生径路を辿ったのかを明らかにした研究が中心であった。一方で、「その人が目指してはいるが、まだ経験・到達していない事象(Xとする)」は等至点としての設定が困難であり、「Xという目標や未来に向かいながらも、彷徨いの最中にいる人」は研究参加者として選定されにくい傾向にあった。

なお、TEMの既存の概念には、未来・目標志向の等至点概念として「セカンド等至点(Second Equifinality Point, 2nd EFP)」という概念があるが、これは歴史的構造化ご招待との関連がほとんど議論されていない。セカンド等至点とは、「研究にご招待して話していただく

方、ご本人の視点からみた EFP」(サトウ, 2017, p. 8) のことである。例えば、研究者が、研究参加者の経験した「A 大学に入学する」という事象に関心を持ち、それを等至点として設定したとする。しかし、それは研究者の目の付け所にすぎず(サトウ, 2015b, p. 9)、研究参加者本人にとっては、「A 大学に入学する」という経験の後の「研究者になる」という未来展望の方が重要な意味を持つということも考えられる。そのため、TEA においては、「研究者が聞き取った話をもとにして、本人にとって重要な未来展望を切り出す」(サトウ, 2015b, p. 9) ことが重視されており、質的研究の質を保証する一つの指標として、セカンド等至点の解明が挙げられている\*6(サトウ, 2015b, p. 12)。このように、セカンド等至点は、研究参加者と研究者の納得のいく TEM 図を作成する上で重要な概念であるが、①研究設問の検討の段階(調査前)ではなく、調査・分析を経て初めて設定される点、②歴史的構造化ご招待との結びつきがなされていない点においても、等至点と異なる性質を持つ。そのため、上述の通り、「X という目標や未来に向かいながらも、彷徨いの最中にいる人」は研究参加者として選定されにくかった。

このような中、近年、人が目標や未来に向かうプロセスを理解するために、「未来等至点」(豊田, 2017)や「未達等至点」(河本, 2021)といった新たな概念が提案されている。以下に、それぞれの概要を説明する。

第一に、豊田(2017)に基づき、未来等至点について説明する。豊田(2017)は、専門職大学院ビジネススクールの修了生を対象として、ビジネススクールでの学びを生かす働き方を展望するという目的のもと、キャリアデザインセミナーを実施した。同セミナーでは、自身の未来展望を言語化する方法として、TEA の枠組みを自己分析に用いる「自己 TEA 分析」が取り入れられ、そこで新たに考案された概念が未来等至点である。豊田(2017, p. 97)は未来等至点について、「そこに到達することは今のままの自分の能力ややり方では見通しが立たないが、今後成長し努力し、あるいは周囲の力を借りることで、いつかは達成できるかもしれない、してみたいと願う、自己の価値観と信念に根差す自己の未来像」であると説明している。

第二に、河本(2021)に基づき、未達等至点について説明する。河本(2021)は、東日本大震災による被災者の

生活復興プロセスを明らかにすることを目的とし、未達等至点の概念を提案した。未達等至点とは、「調査時点で現実には等至点に達していない『未達』の状態にあって、死ぬまで到達し得ないという『未達』の可能性を意識しながらも、常に等至点の方向を目指す」\*7(河本, 2021, p. 30)ということを表した概念である。

以上のように、これまでの研究においては、未来・目標志向の等至点概念が提唱されてきた。しかし、等至点概念と理論上紐づいているはずの歴史的構造化ご招待については、十分な議論がなされていない。そこで、本稿では、歴史的構造化ご招待について再考し、未来・目標志向の等至点概念も包括できるような理論的拡張を提案することによって、TEA の理論的枠組みを統合的に発展させることを目指す。

## 歴史的構造化ご招待における「歴史」の再考

前節で述べた通り、既存の歴史的構造化ご招待においては、目標や未来に向かいながらも彷徨いの最中にいる人を研究参加者にできないという限界があり、研究参加者の選定の間口を広げるための理論的拡張が求められる。そこで、本節では、カーの歴史哲学とヴァルシナーの文化心理学から得られた示唆に基づき、歴史的構造化ご招待における「歴史」を再考する。

### 1 カーの歴史哲学からの示唆

歴史的構造化ご招待の理論を発展させる上で鋭い示唆を与えてくれるのが、戦後の歴史学に大きな影響を与えた、カー(1962/1961)の『歴史とは何か』である。同書は、人文・社会科学における古典として数多く参照されており(西村, 2015)、そのタイトル中の問いに対して、以下の答えを示している。

「『歴史とは何か』に対する私の最初のお答えを申し上げることにいたしましょう。歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります」(Carr, 1962/1961, p. 40)(下線は本稿著者による)

上記の「歴史とは現在と過去との対話である」とする

\*6 TEM における質的探究の完了は「TEM 的な飽和」と呼ばれており(サトウ, 2015b, p. 12)、そのためには、研究者と研究参加者の異なる見方を融合させる「トランス・ビュー」が重要であるとされている(サトウ, 2017, p.9)。

\*7 ただし、「EFP」を「等至点」に置き換え。

カー（1962/1961）の主張は、これまで何度となく引き合いに出されてきたことで知られる（塩川，2010，p. 20）。しかし、上述のカー（1962/1961，p. 40）の言葉は、同書の後半で以下のように言い換えられている点に注目したい。

「歴史とは過去と現在との間の対話であると前の講演で申し上げたのですが\*8、むしろ、歴史とは過去の諸事件と次第に現れて来る未来の諸目的との間の対話と呼ぶべきであったかと思います。過去に対する歴史家の解釈も、重要なもの、意味のあるものの選択も、新しいゴールが次第に現れるに伴って進化して行きます。一番簡単な例を挙げてみますと、主要なゴールが立憲的自由および政治的権利を組織することとされていた時代には、歴史家は過去を立憲的および政治的な見地から解釈しておりました。ところが、経済的および社会的な目的が立憲的および政治的な目的に代わって現れて来ますと、歴史家は過去の経済的および社会的な解釈を始めるようになります」（Carr, 1962/1961, p. 184）（注記および下線は本稿著者による）

このように、カー（1962/1961）は、歴史家がどのような未来を展望するかによって、過去の出来事をどのように解釈するかが異なることを指摘したのである。上記のように、「歴史とは何か」に対する答えが「現在と過去との対話」ではなく「過去の諸事件と次第に現れて来る未来の諸目的との間の対話」と言い換えられた背景には、「過去-現在-未来」の時間の捉え方についての以下の考察が見られる。

「私は今まで『過去と現在』という便利な言葉を用い続けて参りました。しかし、判り切った話ですが、現在というのは、過去と未来とを分かち架空の線という概念的な存在に過ぎません。現在を云々する時、私は既に現在とは違った時間的広がりや議論の中に忍び込ませているのです。過去も未来もそれぞれ同じ時間というものの一部分なのでから、過去への関心と未来への関心とが結び合わされているというのは見やすい理であるかと思ひます」（Carr, 1962/1961, p. 159）（下線は本稿著者による）

以上のように、カー（1962/1961）は、過去と現在と未来を別々のものとして捉えるのではなく、歴史が意味

を持つ上では、「過去と未来との間に一貫した関係を打ち樹てる」（Carr, 1962/1961, p. 194）ことが重要であると指摘している。さらに、カー（1962/1961, p. 178）は、「歴史上の事実、何しろ、歴史家がこれに認める意義次第で歴史上の事実になるのですから、完全に客観的であるというのは不可能であります」と主張しており、歴史家が様々な出来事から何を重視し歴史上の事実として選択するかについては、「未来だけが、過去を解釈する鍵を与えてくれる」（Carr, 1962/1961, p. 182）という考えを示しているのである。TEAにおける歴史的構造化ご招待においては、過去の出来事や経験に重きが置かれているが、カー（1962/1961, p. 184）に基づけば、歴史とは「過去の諸事件と次第に現れて来る未来の諸目的との間の対話」なのであり、歴史を未来展望との関係で考えることの重要性が示唆される。

## 2 ヴァルシナーの文化心理学からの示唆

前節では、歴史哲学の知見から、歴史を考える上で未来展望との関係が重要であることが示唆された。本節では、ヴァルシナー（2007, 2014a）を中心に、TEAの理論的基礎となっている動的な記号過程の文化心理学（Cultural Psychology of Dynamic Semiosis: 以下、ヴァルシナーの文化心理学）の特徴について要約する。特にここでは「過去-現在-未来」という時間がどのように捉えられているのか、また、その視座から「歴史」をどのように理解することができるのかについて検討したい。

### (1) ヴァルシナーの文化心理学の特徴

心理学において、記号概念に最初に注目し、現代の文化心理学の源流とされるのがヴィゴツキーである。ヴィゴツキー理論の最も本質的な特徴は「人間にのみ固有な高次心理機能は記号——その最も重要なものは言葉——に媒介されることによって発達すると考える点」（中村，2014，p. 10）にある。

「記号」の概念は、言語学者のソシュールや哲学者パースなどによって「それ自身とは別の何かを表すもの」といった意味で用いられてきた（サトウ，2019）。ヴィゴツキーも、同様の意味で記号概念を用いてきた。一方でヴァルシナーは、記号が時間の流れ（過去-現在-未来）の中で「動的」（dynamic）に機能するという観点を強調したのである。ヴァルシナーは記号を「未来と向き合

\*8 このような表現が用いられているのは、カー（1962/1961）が同氏の連続講演を元に書かれているためである。

う何らかの機能を持ち、過去の状態から何か新しいことへと導く何か」と定義した（サトウ，2019）。すなわち、ヴァルシナーという記号は、時間の流れの中で、人々の行為や発達を導いたり、規制したりするなど動的に機能すると考えられている。

## (2) ヴァルシナーの文化心理学における記号と時間

ヴァルシナーの文化心理学においては、「非可逆的時間」と「拡張的現在」が前提とされる。非可逆的時間とは、簡潔に言えば、後戻りしない時間であり、哲学者ベルグソンに由来する用語とされる（サトウ，2009b）。時間が逆行しないため、人生の意味は後から生じた出来事によって（後成的に）構成されると考えられる。例えば、震災や災害等によって、過去の自分自身の経験が意味づけ直された時、ある出来事を以前とはまったく異なる意味づけとして捉えられるようになる場合がある。そして、「現在」は、主体が存在している時間軸上の一点というよりは、過去や未来と不可分な「拡張的現在」とみなされている（図4）。拡張的現在において、私たちが経験する時間の流れにおける「過去-現在-未来」は相互浸透しており、その境界は絶えざる記号論的調整のプロセスにある。「拡張的現在」では、過去と未来の非対称性を前提としていることも重要である。つまり、未来の可能性の領域は、過去の「実現した」（しなかった）径路との関係の中で、想像力／構想力（イマジネーション）によって構築されるという意味で非対称である（Valsiner, 2014b, 2021）。このとき、現在は、再構築された過去を資源として、眼前にある未来の領域を想像／構想するという情感的な（affective）記号論的調整の場である。

図4 拡張的現在のスキーム



なお、「拡張的現在」と関連して「時間的展望」の概念がある。時間的展望は、ゲシュタルト心理学者のクルト・レヴィン（Lewin, 1956/1951）が提唱したものであるが、勝俣（1995）はこれを「時間的流れ（持続）の中におけるある時点での、個人ないし集団・社会の過去展望、現在展望及び未来展望の有機的関連の総体」（勝俣，

1995, p. 312）と定義している。すなわち、勝俣（1995）においては、「過去-現在-未来」を一つの単位として捉え、その相互依存的な関係を仮定しているのである。「時間的展望」概念には記号論的な視点が含まれていないものの、人間の未来に向けて発達していくプロセスを理解する上で重要な概念の一つである。なお、レヴィンの主眼は、時間的展望の個人差を持つ個人が生活空間内でどのように異なる行動をとり、結果としてダイナミックな社会的な出来事が展開されていくのかを統合された理論によって説明することであり、この点はTEMにも引き継がれている（石盛，2015）。

それでは、ヴァルシナーの文化心理学において、記号概念と時間とはどのように結びつくのだろうか。その関係について、サトウ（2019）は次のように説明している。

「ある人が、ある記号に出会ったとき、その記号が意味するのは、それ以前の誰かが創ったり使ってきた何かですから、記号の意味は過去と現在を接続します。記号と出会っているのは、『いま=現在』ですから（もし記号の意味がわからなければ、その記号が意味する過去と現在は接続されません）。ただし、記号の影響でなんらかの行為を行うとすれば、それは過去でも現在でもなく、未来に属することになります」（サトウ，2019, p. 36-37）

ヴァルシナー（Valsiner, 2004b）は、記号が未来の行為に対して機能する側面を強調するために「促進的記号」という概念を提案した。すなわち、単に記号が「現在」において理解されるというだけでなく、未来の行為を促進ないしガイドするような記号を考えたのである。例えば、「A先生の支えによって挫折を乗り越えた転機をきっかけとして、教師を目指す」という例があるとして、「挫折を乗り越えた」転機は、人生の特定の場面を示す記号として機能し「教師を目指す」という未来を構築するための促進的記号として機能する（土元・サトウ，2019）。この場合、過去の転機が現在を介して未来をガイドしている。記号論的文化心理学においては、記号は社会的・歴史的なものである（過去の構築物である）ものの、未来の行為や発達のために用いられるという点が重視されている。

ヴァルシナーの文化心理学における、人が「未来」や「目標」に向かって発達していくという志向は「目標志向」（goal-oriented: Valsiner, 2014a）と表現される。この見方は、多くの文化心理学的研究においても共有されている。

例えば、TEAとも親和性の高いイマジネーション（想



像力／構想力)に関する研究(Zittoun, 2006; Zittoun & Cerchia, 2013; Zittoun & Gillespie, 2015)においても、未来との関連が指摘されている。イメージーションとは、「いま-ここ」を短時間的に離れ、過去や未来を探索し、戻ってくるという「ループ」である。イメージーションは日常においても行われるが、人間発達にとっても重要な機能である。例えば、葛藤の最中にある人や、震災や挫折といったラプチャー(破裂的経験)を経験し時間が止まったように感じられている人・集団が、イメージーション・ループを通して、未来を構想したり、代替選択肢を生み出したりすることもある。

また、ガムサフルディア(Gamsakhurdia, 2019)は、人が留学先や移住先の国や地域へと移動する際、事前に現地の情報を収集したり、そこでの生活を想像したりなど、未来志向的な自己変容(適応)がなされることを強調した(向文化変容; proacculturation)。これは、主流の文化変容(acculturation)の研究\*9が機械論的・本質主義的に文化を捉えているのに対して、人が新しい文化に出会う際の「適応」における構築的・主観的な側面を強調したものである。

さらに、ヴァルシナー・土元・小澤・陳(Valsiner & Tsuchimoto & Ozawa & Chen, 2021)は、「愛」のような「更一般化された意味領域」(hyper-generalized meaning field: Valsiner, 2014aを参照)を探索するために、「詩→絵→説明→音楽・・・」と表現様式を切り替えるという、新しい文化心理学の方法論を提案している\*10。この方法論の前提として、人の記憶は、現在までの経験を素材として「未来に向けて絶えず構成」される(前構築; pre-construction)という点が指摘されている。すなわち、記憶を繰り返し想起することは、「同じもの」の再生産ではなく、目の未来に向けて、(ただし現在において)記号化された産物であると考えられている。

以上、ヴァルシナーの文化心理学における特徴を整理したが、ここでは「目標志向」的な側面が重視されて

いる。ヴァルシナーの文化心理学においては、「過去-現在-未来」という時間は、人間の発達において、区別されつつも相互に結びついたものとして捉えられており、とりわけ人間の行為や発達は、「未来」に向けて組織化されていると考えられている。

## 総合考察

本研究では、歴史的構造化ご招待の枠組みを拡張させる上で、カーの歴史哲学とヴァルシナーの文化心理学を手掛かりとし、「歴史」の考えを捉え直した。現状のTEAの枠組みで描かれる人生経路は、調査時点(=現在)において構築された過去(=歴史、個人史)であり、その過去は、基本的にはその人の記憶に基づき、再構成されたものである。カー(1962/1961)の歴史哲学に基づけば、歴史家が様々な出来事から何を重要と見なすかは、どのような未来を展望しているかということと密接に結びついている。この考えをTEAの研究に援用すると、歴史家は研究参加者ともなり、研究参加者の未来展望はその人の個人的歴史の解釈や意味づけと不可分な関係にあることが示唆される。また、ヴァルシナーの文化心理学(Valsiner et. al., 2021)に基づけば、調査時点(=現在)において構築される過去は、「未来」の目標に向かって組織化された過去である。つまり、研究参加者の「過去」の経験と「現在」、「未来」との関係性を切り離して考えることはできないのである\*11。これらの示唆を踏まえると、歴史的構造化ご招待においても、歴史を単なる「過去の出来事」として捉えるのではなく、その人にとっての拡張的現在(未来を含む)と捉えることが重要である。

そこで、本稿では、歴史的構造化ご招待の枠組みを発展させ、その人の過去の出来事や経験だけでなく、未来展望も包括するという理論的拡張を提案する(「拡張版・歴史的構造化ご招待」\*12)。拡張版・歴史的構造化ご招

\*9 文化変容(acculturation)とは、異なる文化を持つ集団が継続的に直接接することによって、その双方あるいはいずれかの集団のもともとの文化的パターンが変化するような結果を生ずる現象を包含する概念である(Redfield, Linton & Herskovits, 1936)。この概念は、元来、集団の変容を説明するために提案されたが、近年では、個人の变容を説明する場合にも用いられている。文化変容の概念には、文化を所与の実体として見なし、複数の文化を独立したものとして捉えるという前提があり、人間の意味づけや再構築のプロセスが捨象されるなどの限界がある。なお、これは、「1 歴史的構造化ご招待が依拠する考え方」の節で説明した比較文化心理学の考え方に近い概念である。

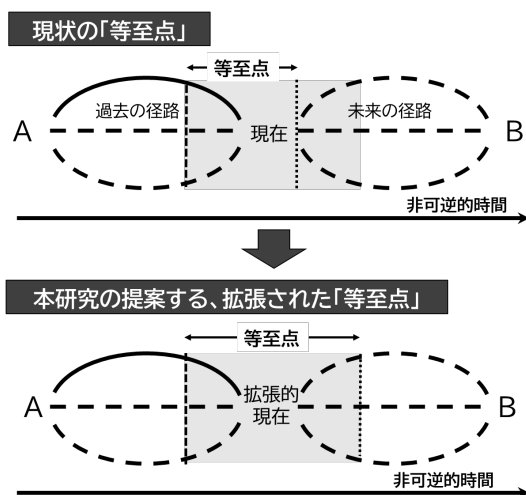
\*10 この研究では、対象となる経験や概念(例えば、愛)について、様式を切り替えながら繰り返し表現する(詩を作成する、絵を描く、説明する、・・・)中で、どのような表現の変化や新しさが生み出されるのかという点に着目している。

\*11 このような見方は、やまだ(2017)の提唱する「もの語り(ナラティブ)の時間」とも共鳴する。もの語りの時間軸では、「過去、現在、未来などという概念そのものが、ある種のフィクションであり、すべて『現在』の一部である」とされている(やまだ, 2017, p. 9)。つまり、「過去」・「現在」・「未来」を独立のものとして捉えるのではなく、『過去』も『未来』も、『現在』と相互作用しながら、『生きもの』のように変容する」と考えられているのである(やまだ, 2017, p. 10)。そのため、個人が個々の出来事をどのようにもの語るかは、「過去」・「現在」・「未来」のそれぞれを切り離して考えることはできないのである。ただし、やまだ(2017)の「もの語りの時間」の概念を援用し、TEAの時間概念をどのように発展させるかは、さらなる検討の余地がある。

\*12 ここでいう「拡張」には次のような含意がある。第一に、歴史

待は、それと不可分な関係にある等至点概念を図5のように拡張させることも意味している。すなわち、本研究は、現状の等至点概念を時間的に拡張させ、「過去から現在」までに経験した事象だけでなく、その人が展望する「未来」の事象も含めて設定できるよう提案するものである。これによって、従来 TEA に明確に位置づけられていなかった、レヴィン (1956/1951) の「時間的展望」も、歴史的構造化ご招待の枠組みに含めることが可能となる。

図5 現状の等至点概念と拡張された等至点概念のモデル



本研究で「拡張版・歴史的構造化ご招待」を提案することによって、TEA 研究者は、これまで研究参加者にできなかった、等至点的事象に向けて歩みつつある人々を対象に研究することができる。序論で述べた通り、等至点概念は研究関心に基づいて設定される概念であり、等至点概念の拡張は、TEA によってより多様な研究関心が探究できるようになることを意味する。例えば、教育の現場においては、学習意欲がありながらも、それを学習行動に結びつけることを困難と感じている学習者の存在があり (例: 小山, 2020), 拡張された等至点概念は、そのような人々が彷徨いながらも目標に向かうプロセスを解明する足掛かりを提供する。

このように、本研究で行った理論的拡張によって、「研究関心上の出来事 (例: 「A 大学に入学する」) をまだ実

現していない人々」をも、歴史的構造化ご招待の対象に含めることができる。しかし、ここで留意すべき点として、本研究の意義は、等至点を未来に設定するというよりも、歴史的構造化ご招待がこれまで依拠してきた「歴史」観を問い直し、そこに未来の視点を取り入れることで、この概念を等至点とともに拡張することにある。それによって、結果的に、特定の未来展望を等至点として設定することも可能となる。なお、ここでいう未来展望とは、「現在」「過去」と独立に存在する (と仮定される) 「未来」に対する展望というよりは、「拡張的現在」における未来展望 (目標発生; teleogenesis; Valsiner, 2019) を意味する。

本研究から示唆されるのは、調査時点での「現在」における意味づけは、その時点における「過去」や「未来」との関係で、絶えず再構築されるということである。この点は、ナラティブ心理学に対しても示唆的であろう。現代までのナラティブ研究は、ブルーナーが目指してきた「意味の行為」の探究というよりも、「行為の意味」の解明に傾倒してきた (横山, 2019)。「意味の行為」の探究とは、「人間が意味を希求し、生成し、使用する過程が如何なる行為過程であるのか、そこに文化というものがどのように関わっているのか」 (横山, 2019, p. 9) を問うものである。「行為の意味」の研究のほとんどは、ストーリーが語られる「現在」を確固たるものとして捉えており、そのような語りがいかに動的に変容してきたのか (変容していくのか) については不問になされている。人間がナラティブを介してどのように発達していくのかを理解するためには、「現在」における意味づけがどのように変容していくのかを「過去-未来」との関係で捉えることが重要であり、その点において TEA とナラティブ研究は接点を持ちうるのである。

さらに、本研究で提案した拡張版・歴史的構造化ご招待は、1 事例研究やオートエスノグラフィー研究としての TEA の展開にも寄与する。例えば、保育士の母親支援のプロセスを扱った 1 事例研究 (中坪・小川, 2012) や、教員志望の学生が経験したキャリアの転機を扱ったオートエスノグラフィー研究\*13 (土元, 2022) など、TEA は 1 名の研究参加者の人生径路を丁寧に分析するためにも活用されてきた。このように、自分自身を研究対象とする際、その研究が意義を持つためには、その人の「過去または現在の経験」と社会的事実との関連性を記述することが要求される場合が多い。例えば、オート

的構造化ご招待における「歴史」についての考え方を、未来展望を含めたものに拡張させるということである。第二に、このように歴史的構造化ご招待を拡張させることは、等至点概念も拡張させることを意味する (つまり、「ご招待」できる人々を拡げることにつながる) ということである。第三に、これまでの歴史的構造化ご招待の枠組みを引き継ぎつつ、それを理論的に発展させるということである。

\*13 オートエスノグラフィーとは、研究者が自分の「有する文化」 (own culture) を探究するための、学問分野・研究アプローチの総称である (土元, 2022)。

エスノグラフィーのように研究者自身を研究する意義を正当化するのには、障がいや病いの当事者研究などの部類に入らない限りは難しいと言われている（井本，2013）。しかし，TEA における等至点概念に未来展望も含めることで，「その人が過去に経験した」社会的事実だけでなく，将来のイマジナティブな予期・展望（例：「事業を立て直したい」「この地域に住み続けたい」）を研究関心として探求することができる。このことは，人の経験における外的・客観的な事実をエビデンスとして研究を正当化するのではなく，個人の内的な意味づけや発達プロセスを探求する研究の意義を提起することにもつながると考えられる。

## 引用文献

- ベルタランフィ, L. V. (1973) 一般システム理論——その基礎・発展・応用（長野敬・太田邦昌，訳）。みすず書房。（Bertalanffy, L. V. (1968) *General system theory*. New York: G. Braziller.）
- カー, E. H. (1962) 歴史とは何か（清水幾太郎，訳）。岩波書店。（Carr, E. H. (1961) *What is history?*. London: Penguin.）
- Gamsakhurdia, V. L. (2019) Proculturation: Self-reconstruction by making “fusion cocktails” of alien and familiar meanings. *Culture & Psychology*, 25 (2), 161–177. <https://doi.org/10.1177/1354067X19829020>
- Hubbard, R., & Ryan, P. A. (2000) The historical growth of statistical significance testing in psychology: And its future prospects. *Educational and Psychological Measurement*, 60 (5), 661–681. <https://doi.org/10.1177/00131640021970808>
- 井本由紀 (2013) オートエスノグラフィー。藤田結子・北村文（編），ワードマップ 現代エスノグラフィー——新しいフィールドワークの理論と実践（pp. 104–111）。新曜社。
- 石盛真徳 (2015) 生活空間における人間行動および人間関係を分析するためのシステム論的アプローチ——場理論，相互依存性理論，ソシオン理論，TEM を中心として。関西学院大学社会学部紀要，No. 120, 13–25.
- 勝俣暎史 (1995) 時間的展望の概念と構造。熊本大学教育学部紀要（人文科学），44, 307–318.
- 木戸彩恵 (2019) 文化心理学と比較文化心理学。木戸彩恵・サトウタツヤ（編），文化心理学——理論・各論・方法論（pp. 7–13）。ちとせプレス。
- 河本尋子 (2021) 災害から生活復興に向かうプロセスと内的変容に関する一考察——複線径路等至性アプローチを用いた東日本大震災の事例分析。常葉大学社会環境学部研究紀要，No. 7, 21–32. <http://doi.org/10.18894/00002105>
- 小山多三代 (2020) 計画的行動理論を援用した日本語学習意欲の長期変容プロセスの解明——日本国内のバングラデシュ IT 人材に対する学習行動促進の支援策の検討。東京外国語大学大学院総合国際学研究所修士論文（未刊行）。
- レヴィン, K. (1956) 社会科学における場の理論（猪股佐登留，訳）。誠信書房。（Lewin, K. (1951) *Field theory in social science: Selected theoretical papers* (Edited by Dorwin Cartwright). New York: Harper & Brothers.）
- 森直久 (2009) 第一期 TEM 完成，その後。サトウタツヤ（編著），TEM ではじめる質的研究——時間とプロセスを扱う研究をめざして（pp. 75–91）。誠信書房。
- 中村和夫 (2014) ヴィゴツキー理論の神髄——なぜ文化-歴史的理論なのか。福村出版。
- 中坪史典・小川晶 (2012) 保育者の感情労働。安田裕子・サトウタツヤ（編著），TEM でわかる人生の径路——質的研究の新展開（pp. 88–99）。誠信書房。
- 西村邦行 (2015) 世界にとどまる——E・H・カー『歴史とは何か』の政治思想。北海道教育大学紀要。人文科学・社会科学編，65 (2), 13–28.
- Omi, Y., & Komata, S. (2005) The evolution of data analyses in Japanese psychology. *Japanese Psychological Research*, 47 (2), 137–143. <https://doi.org/10.1111/j.1468-5884.2005.00281.x>
- Redfield, R., Linton, R., & Herskovits, M. J. (1936) Memorandum for the Study of Acculturation. *American Anthropologist*, 38 (1), 149–152.
- サトウタツヤ (2009a) HSS の発祥と TEM との融合。サトウタツヤ（編著）TEM ではじめる質的研究——時間とプロセスを扱う研究をめざして（pp. 33–39）。誠信書房。
- サトウタツヤ (2009b) TEM 発祥の時間的経緯。サトウタツヤ（編著），TEM ではじめる質的研究——時間とプロセスを扱う研究をめざして（pp. 1–16）。誠信書房。
- サトウタツヤ (2015a) 複線径路等至性アプローチ——方法論的複合体としての TEA。安田裕子・滑田明暢・

- 福田茉莉・サトウタツヤ (編), TEA 実践編——複線径路等至性アプローチを活用する (pp. 4-7). 新曜社.
- サトウタツヤ (2015b) EFP とセカンド EFP ——等至点の再設定の可能性. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編), TEA 実践編——複線径路等至性アプローチを活用する (pp. 8-12). 新曜社.
- サトウタツヤ (2017) 等至性とは何か——その理念的意義と方法論的意義. 安田裕子・サトウタツヤ (編著), TEM でひろがる社会実装——ライフの充実を支援する (pp. 1-11). 誠信書房.
- サトウタツヤ (2019) 記号という考え方——記号と文化心理学 その 1. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編), 文化心理学——理論・各論・方法論 (pp. 27-39). ちとせプレス.
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヴァルシナー ヤーン (2006) 複線径路・等至性モデル——人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して. 質的心理学研究, 5 (1), 255-275. [https://doi.org/10.24525/jaqp.5.1\\_255](https://doi.org/10.24525/jaqp.5.1_255)
- 塩川伸明 (2010) 現代史における時間感覚——事件・歴史家・読者の間の対話における距離感. アリーナ, No. 10, 20-29.
- Sovran, T. (1992) Between similarity and sameness. *Journal of Pragmatics*, 18 (4), 329-344. [https://doi.org/10.1016/0378-2166\(92\)90093-Q](https://doi.org/10.1016/0378-2166(92)90093-Q)
- 豊田香 (2017) 社会人のためのキャリアデザイン——未来等至点を描くキャリアデザインセミナーの設計と実施. 安田裕子・サトウタツヤ (編著), TEM でひろがる社会実装——ライフの充実を支援する (pp. 88-108). 誠信書房.
- 土元哲平・サトウタツヤ (2019) 転機研究における「個人と社会との相互作用」のアプローチ. キャリア教育研究, 37 (2), 35-44. [https://doi.org/10.20757/jssce.37.2\\_35](https://doi.org/10.20757/jssce.37.2_35)
- 土元哲平 (2022) 転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー. ナカニシヤ出版.
- Valsiner, J. (2001) *Comparative study of human cultural development*. Madrid: Fundacion Infancia y Aprendizaje.
- Valsiner, J. (2004a) *Culture and Human Development* (2nd Ed.). London: SAGE.
- Valsiner, J. (2004b) The promoter sign: Developmental transformation within the structure of dialogical self. Paper presented at the Biennial Meeting of the International Society for the Study of Behavioral Development (ISSBD).
- Valsiner, J. (2007) *Culture in minds and societies foundations of cultural psychology*. Los Angeles: SAGE.
- Valsiner, J. (2014a) *An invitation to cultural psychology*. Los Angeles: SAGE.
- Valsiner, J. (2014b) Needed for cultural psychology: Methodology in a new key. *Culture & Psychology*, 20 (1), 3-30. <https://doi.org/10.1177/1354067X13515941>
- Valsiner, J. (2019) Hyper-generalization by the human mind: The role of sign hierarchies in meaning-making processes. 4th Hans Kilian Preis Lecture, Bochum, April 28, 2017 (publication version Jan, 9, 2019).
- Valsiner, J. (2021) *General human psychology*. Cham, Switzerland: Springer.
- Valsiner, J., & Sato, T. (2006) Historically structured sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology? In J. Straub, C. Kölbl, D. Weidemann, & B. Zielke (Eds.), *Pursuit of meaning: Theoretical and methodological advances cultural and cross-cultural psychology*. Bielefeld: Transcript, 215-252.
- Valsiner, J., Tsuchimoto, T., Ozawa, I., & Chen, X. (2021) The inter - modal pre - construction method (IMPreC): Exploring hyper - generalization. *Human Arenas*. (Online first) <https://doi.org/10.1007/s42087-021-00237-8>
- やまだようこ (2017) ビジュアル・ナラティヴ——時間概念を問う. こころの科学とエピステモロジー, 創刊準備号, 9-15. [https://doi.org/10.50882/epstemindsci.0.1\\_9](https://doi.org/10.50882/epstemindsci.0.1_9)
- 安田裕子 (2015) 促進的記号と文化——発生の三層モデルで変容・維持を理解する (その 1). 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編), TEA 実践編——複線径路等至性アプローチを活用する (pp. 27-32). 新曜社.
- 安田裕子 (2017) 生み出される分岐点——変容と維持をとらえる道具立て. 安田裕子・サトウタツヤ (編著), TEM でひろがる社会実装——ライフの充実を支援する (pp. 11-25). 誠信書房.
- 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) (2015)

TEA 実践編——複線径路等至性アプローチを活用する。新曜社。

安田裕子・サトウタツヤ（編著）（2012）TEM でわかる  
人生の径路——質的研究の新展開。誠信書房。

横山草介（2019）ブルーナーの方法。溪水社。

Zittoun, T. (2006) *Transitions: Symbolic resources in development*. Greenwich, CT: IAP.

Zittoun, T., & Cerchia, F. (2013) Imagination as expansion of experience. *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 47 (3), 305–324. <https://doi.org/10.1007/s12124-013-9234-2>

Zittoun, T., & Gillespie, A. (2015) *Imagination in human and cultural development* (1st Ed.). London: Routledge. <https://doi.org/10.4324/9780203073360>

◆謝辞

本研究の一部は、JSPS 科研費 JP22J00165 の助成を受けている。

発行：TEA と質的探究学会

Japanese Association of TEA for Qualitative Inquiry

<https://jatq.jp/index.html>

 JATQ

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

 ratik